

# 東洋文庫等での東洋史学コースの 学外研修の教育的効果について

小川 快之 ・ 中村 威也 ・ 相原 佳之

## 1 はじめに

いかにすれば大学生の東洋史（主に東アジアの歴史）に対する知的好奇心を高め、それを上手く卒業論文の作成などの研究活動へと結びつけることができるのかという課題については、今日まで多くの大学の東洋史担当の教員が様々な工夫をしてきたと思われる。しかし、管見の限り、実践報告も多く長い研究の歴史がある中学校・高等学校における歴史教育に比べて、大学の東洋史関連の授業に関する授業研究の類は極めて少なく、今日まで授業方法やその教育的効果に関する研究が本格的に行われることはあまりなかったと思われる。

そうした中、近年、甘利弘樹氏が精力的に研究成果を発表し、筆者小川も国士舘大学の授業で行った自身の試みに関する考察を行ったことがあるが、依然として本格的な研究は多くはない<sup>(1)</sup>。社会のグローバル化が進み、日本と東アジアの諸地域との交流が活発化している今日においては、まず偏見や先入観なしに現象や実態を認識することが求められている。また、ある情報を安易に受け入れ信じてしまわずに、その情報の「確かさ」を確認する必要性は増す一方であり、大学の歴史学教育における「実証」「検証」といった手続きに関する学びは、現代社会においてもっとも求められている素養と言えるであろう。

このような、現代の社会人に求められる認識や素養は、ある地域の歴史的背景、文化的背景に関する深い知識の習得とそれらの分析・考察を目指す旧来の歴史学教育の課程でも育成されてきたが、社会や学生の変化に十分対応しきれてはいないように思える。さらに教材の開発も含め、授業方法の研究も十分に行われているとは言いがたい。

こうしたことを考えると、今後東洋史に関心をもつ学生を増やし、その教育・研究活動を活性化させるためには、単に東洋史の研究をするだけではなく、新しい研究成果や新たな手法をとりいれ、より効果がある教育方法を探求する必要があると言える。特に、(A) 情報社会における情報に対する対応力・分析力と (B) グローバル化が進む社会における多様性に対する許容・理解の2点については、歴史学教育のなかでも力を入れるべきものであると考えられる。

そこで本稿では、そうした作業の一環として、国士舘大学文学部の東洋史学コースで、2018年6月14日（木）に行った学外研修での試みとその教育的効果、課題点について、学生の作業用紙の内容を検証しながら考察してみたい。

## 2 今回の学外研修の目的と概要

### (1) 今回の学外研修の目的

東洋史学コースでは、現在主に日本と深い関係をもつ東アジアの諸地域の社会や文化の多様性や日本との関わりについて深く理解する作業の一環として、歴史的な研究方法を用いて、歴史上の諸事象の特徴や背景について分析し、考える能力や異文化理解力の育成にも繋がる歴史上の多様な価値観について正しく認識する能力などを養うことを目指した教育を行っている。

それを踏まえて、今回の学外研修では、「東洋文庫と中国風の史跡をめぐる旅——東洋文庫・湯島聖堂・小石川後樂園」をテーマとし、東洋文庫では様々な種類の書物を実見することにより、多様な社会の存在に対する認識を持つこと、また、湯島聖堂と小石川後樂園では、江戸時代の日本に中国文化がどのように受容されたのかについて考えることを目的とした。

東洋文庫（公益財団法人）は、三菱第三代当主の岩崎久彌氏が1924年に設立した日本における最古かつ最大の東洋学専門の研究図書館（図書館兼研究所）であり、イギリスの大英図書館、フランスの国立図書館、ロシアの東洋学研究所、アメリカのハーバード・エンチン（燕京）研究所と並び、世界5大東洋学研究図書館の一つに数えられ、その蔵書数は国宝5点、重要文化財7点を含む約100万冊にのぼる。また、日本における東洋学の「中央研究所」的な役割も担い、国内外の多くの研究者の活動・交流の場にもなってきた。

さらに2011年にはミュージアムが併設され、展示を通して多様な価値観や社会のあり方を提示する博物館の性格も加わった。当日は、中国史・日本史の伝説上の人物や歴史上の悪者とされてきた人物などが、書物でどう描かれてきたのかをたどる企画展「悪人か、ヒーローか」が開催されていた<sup>(2)</sup>。

湯島聖堂は、文京区湯島にある孔子廟で、江戸時代に徳川綱吉が創建し、後に昌平坂学問所が置かれた場所である。入徳門（宝永元（1704）年建造）と水屋以外は、関東大震災で焼失し、孔子を祀る大成殿は東洋建築に造詣が深い建築家の伊東忠太が寛政年間の姿を模して設計したものである。

小石川後樂園は、江戸時代に水戸徳川家の祖徳川頼房が造り、徳川光圀が完成させた回遊式築山泉水庭園である。光圀が明の儒学者朱舜水の意見を取り入れて、円月橋、西湖の堤などを造らせたため、中国趣味豊かな名園として知られる。円月橋は朱舜水の設計とされ、西湖の堤は杭州の西湖の堤に見立てたものである。

### (2) 今回の学外研修の概要

今回の学外研修には、2年生21名、3年生26名（中国・山西大学からの交換留学生1名を含む）の計47名が参加した。研修全体の引率は、東洋史学コース

特任教授で東洋文庫研究員でもある筆者小川が、同コース主任の岡島建教授とともにいった。なお、書庫見学では、筆者小川とともに同コース非常勤講師の筆者中村が東洋文庫研究員として案内・解説を担当した。また、書庫見学の事前準備では、東洋文庫研究員の筆者相原が諸手続きなど下準備を行った。

#### 【事前準備】

東洋文庫ミュージアムの企画展見学を学外研修に組み込んだのは、筆者小川が、前述（A）について効果があるのではないかと考えてのことであった。悪者とされてきた人物の書物における表現や描かれ方には、誇張や偏りがあり、実際はその通りではないかもしれないという、情報の「確かさ」について、大学生にもなじみのある人物が取り上げられ、解説されていたからである。

さらに大学生にとって身近に感じやすい「社会生活史」を重視し、より効果的な学外研修になるよう、前述（B）の視点から、東洋文庫の書庫においてさまざまな書籍を見てもらうことも研修に加え、事前に東洋文庫の書庫で調査を行った。鑑賞物の選択や作業用紙の作成に関しては、筆者共同研究の場である「漢籍教材研究会」で議論を重ね、検討した。

#### 【事前学習の実施】

研修前には、学生の理解度を上げるために、作業用紙を作成・配布して、事前学習を行った。用紙は《資料①》を参照。特に2年生には、筆者小川が、必修科目の「東洋史研究法2」（総合的に基礎的な研究能力を身に付けるための授業）で、1回分の授業を使い、スマホも活用しながら、用紙の「事前準備」の欄へ記入してもらった。

作業用紙は、「事前準備」の欄、「メモ・コメント」の欄だけではなく、学生の観察や考察を促すために、「考えてみましょう」という質問に答える形式の欄も設けた。また、学芸員資格取得希望者がいることもあり、「展示・解説の仕方」のメモ・コメント欄も設け、博物館学的考察もしてもらうことにした。これは、大学生もSNSなどで日常的に「情報」の発信者となっている現状をふまえ、他者に対して望まれ、理解されるような情報の提示・伝達方法を考えてほしいという筆者中村の発案による。

#### 【当日の研修内容】

当日は午前9時に大学梅ヶ丘校舎に集合してバスに分乗した。10時頃に東洋文庫に到着し、2階の会議室で段取りの説明を行い、書庫見学を開始した。書庫内には一度に多くの人が入れないため、10~15名程度ごとに班分けを行い、交替で書庫見学を行った。また、書庫見学をしていない学生はミュージアムを鑑賞するようにした。午後1時半頃にバスで昼食会場へ向かい、昼食後、再びバスに乗り、3時過ぎに湯島聖堂に到着し、大成殿などを見学した（大成殿内部は非公開）。その後バスに乗り、3時半過ぎに小石川後樂園に到着し、パンフレットを

使いながら園内を各自見学した。5時前に現地で1次解散を行い、残りの学生は再びバスに乗り、6時頃に大学梅ヶ丘校舎に到着し、2次解散をした。なお、作業用紙は、各自家に持ち帰り清書してもらうこととし、後日、授業の場などで回収した。

資料1 学外研修・作業用紙

<p style="text-align: center;"><b>2018年度学外研修・作業用紙【A】</b></p> <p>学籍番号【                      】 姓名【                      】</p> <p>★今回の研修の目的は？→テーマは「東洋文庫と中国風の武藝をめぐる旅—東洋文庫・湯島聖堂・小石川後樂園」です。→東洋文庫では様々な種類の書物に触れて、東アジア前近代の書物の世界に対する理解を深めましょう。また、湯島聖堂と小石川後樂園では、江戸時代の日本に中国文化がどのように受容されていたのかを考えてみましょう。</p> <p>→【事前準備】僕は学外研修前に各自でホームページなども使って調べ、説明を書いています。【メモ・コメント】欄は各自見学しながら書いてください。欄が足りない場合は裏面を使いましょう。</p> <p>【1】東洋文庫とは？</p> <p>【事前準備①】東洋文庫とはどういうところか調べてみましょう。</p> <div style="border: 1px solid black; height: 30px; width: 100%;"></div> <p>【2】東洋文庫ミュージアム：特別展「悪人か、ヒーローか」。</p> <p>→見つけた展示物とその簡単な説明、展示物に関するコメント・感想、及び展示・解説の仕方に関する感想などを書きましょう。ミュージアムでは、スマホでの撮影ができません。ただし、フラッシュ撮影は不可です！</p> <p>【展示物：メモ・コメント】内容ごとに①～③と数字をふりましょう。</p> <p>①</p> <div style="border: 1px solid black; height: 100px; width: 100%;"></div> <p style="text-align: center;">1</p>	<div style="border: 1px solid black; height: 200px; width: 100%;"></div> <p style="text-align: center;">2</p>
<p style="text-align: center;"><b>2018年度学外研修・作業用紙【B】</b></p> <p>学籍番号【                      】 姓名【                      】</p> <p>【3】東洋文庫参観</p> <p>★参観では、スマホの持ち込みはしないでください！筆記用具は前巻のみです。</p> <p>(3-A) 3階：多民族多言語の世界を知る。</p> <p>→その世界を書物から感じましょう。</p> <p>【鑑賞物その1】『漢文附注新訂約書』(清代末期)</p> <p>滿洲族が建てた清の時代には、漢語系(漢語文字)で書かれた書物も出版されました。この書物は新約聖書、旧約聖書を漢語語に翻訳したものです。</p> <p>【事前準備②】漢語文字とは？その記述法は？</p> <div style="border: 1px solid black; height: 100px; width: 100%;"></div> <p>【メモ・コメント】</p> <p>【鑑賞物その2】『河口聖海講求史経緯』</p> <p>河口聖海がチベットから持ち帰ったチベット文字で書かれた仏教の経典です。経典という形態の書物に書かれています。なお、河口聖海のチベット旅行については、『チベット旅行記(上・下)』(講談社、2015年)に書かれています。</p> <p>【事前準備③】①河口聖海とは？</p> <p>②経典(ばいよう)とは？</p> <p>③チベット文字の記述法は？</p> <div style="border: 1px solid black; height: 100px; width: 100%;"></div> <p style="text-align: center;">3</p>	<p>【メモ・コメント】</p> <p>(3-B) 6階：漢文史料の記述法を知る。</p> <p>【鑑賞物その3】『土工部業』(清代末期)</p> <p>中国の伝統的な書物には注釈がつけられました。それらは一般には「附註」などで記載されましたが、この書物では色分けという珍しい方法で書かれています。</p> <p>【事前準備④】土工部とは？</p> <p>【調べてみましょう】どうやって附けたと思いますか？</p> <div style="border: 1px solid black; height: 100px; width: 100%;"></div> <p>【メモ・コメント】</p> <p>【鑑賞物その4】『由理突氏宗譜』(清代初期)</p> <p>明清時代には宗族(父系の親族ネットワーク)が盛んに作られ、族譜(宗譜、家譜とも言う)が盛んに編纂されました。これは由理(地名)の突氏一族が編纂したものです。ページは、有名な祖先の肖像(香中堂)と墓地の図です。</p> <p>【事前準備⑤】族譜とは何ですか？</p> <div style="border: 1px solid black; height: 100px; width: 100%;"></div> <p style="text-align: center;">4</p>

2018 年度学外研修・作業用紙【C】

学籍番号 [ ] 姓名 [ ]

【3】(3-B) 【鑑賞物その4】『由蓮黄氏宗譜』(清代初期)

【考えてみましょう】なぜお墓の形を族譜に載せているのでしょうか？なぜ包み込むような感じに書かれているのでしょうか？

【メモ・コメント】

【3-C】6冊：風俗図の世界を知る。

【鑑賞物その5】『回回風俗圖』(1920年代くらい) → 『回回羊肉圖』

「回回」とは回族(イスラム教徒)のことです。中国にはイスラム教が多いです。寧ろは流石により、豚肉を食べてはいけないため、羊や牛肉などを食べていました。これは民国時代のイスラム教使用の羊肉のお店のお店の図です。

【メモ・コメント】

【鑑賞物その6】『前冊(苗族風俗圖)』(清代中期)

清代の中国南方には「苗」(ビョウブミャオ)と呼ばれる少数民族がいました。これはその人々の風俗について書いたものです。

【メモ・コメント】

【4】湯島聖堂

【事前準備④】湯島聖堂とは？自分が特に見たいものは？

【メモ・コメント】

【5】小石川後樂園

【事前準備⑤】小石川後楽園とは？自分が特に見たいものは？

【メモ・コメント】

【アンケート】

①今回の研修について、役に立ったこと、興味をもったことを書いてください。

②今回の研修の内容に興味を持ちましたか？欲出するものにマルをして下さい。  
( )はい ( )まあまあ ( )いいえ  
はい・まあまあ→特に興味をもったものは何ですか？

6

### 3 学生の作業用紙の分析

#### (1) 東洋文庫ミュージアム

企画展「悪人か、ヒーローか」は中国編、日本編、西アジア・ヨーロッパ編に分けられており<sup>(3)</sup>、中国編では以下の展示があった。「紂王・妲己、始皇帝、劉邦・呂后、武帝、曹操、水滸伝の英雄、則天武后、玄宗皇帝、徽宗皇帝、李自成、鄭成功、西太后」<sup>(4)</sup>。

また、日本編では、藤原道長、織田信長、春日局、八百屋お七などに関する展示があり、吉田松陰諷の『清国咸豊乱記』やメイソンの『中国の刑罰』(1804年)も展示されていた。さらに、西アジア・ヨーロッパ編では、ナポレオン・ボナパルトについて詠んだ頼山陽の「佛郎王歌」やマリー・アントワネットが所蔵していたとされる『イエズス会士書簡集』などの展示があった。

なお、ミュージアムでは、企画展以外に、名品室で、『文選集註』(国宝)、「諧命」(清代の辞令書)、『ロシア帝国服飾図鑑』、「アヘン吸飲者とばくち打ち」(ハリー・ダレルの絵画)、『日本昔噺』などの展示があった。また、オリエントホールでは、「安政五カ国条約と近代日本の国際文化交流」、「日中妖怪大集合! 2018」(『山海経広注』『絵本百物語』)をテーマとした展示、モリソン書庫では「フランス東洋学と国立極東学院」をテーマとした展示があった。

学生の知的好奇心やふみこんだ観察を喚起するためには、漫然と展示物を見て、レポートさせるという作業だけでは不十分であり、数多くある対象や方法をあえて絞り、特定の条件を与える工夫や仕組みを設けることが重要である。そこで、

今回の作業用紙では、「気になった展示物とその簡単な説明、展示物に関するコメント・感想、及び展示・解説の仕方に関する感想などを書きましょう」と展示物を「気になった」ものに限定して意見を求め、「展示・解説の仕方」について注意を向けさせて感想を求めた。

その結果、寄せられたコメントの内容を整理すると、展示物（30件。うち企画展20件）、展示法（16件）となった<sup>(5)</sup>。常設展示の展示物へのコメントが10件にのぼったのは、視点（B）のねらいからはずれるものであり意外であったが、東洋史学コースの学生ということもあり、文字や漢籍に描かれた図像など中国史への関心が高いことが分かる。つぎに代表的なコメントの内容を見てみたい。

【展示法】「分かりやすく、かつ読みやすく、おもしろい文章で、他の博物館ではあまり解説は読まないが、今日は多くの解説文を読んだ」（MA）。「副題がうまくまとまっている上、面白い。要約は引き込まれ、先が読みたくなるような文章だった。物語のよう。分かりやすい。悪役はヒーローのように、ヒーローは悪役であったかのようにしているのかと思っていたが、そんな事はなく、事実をどちらにもよらないように書かれていた」（YK）。

「小さい子でも興味がない人でも、イラストが漫画風に書かれていて、読みたくなり、全て読んでしまう感じだった。人物には、カリスマ性、正義感、美しさなどの男女それぞれの項目に☆（5つ）で示されていて、クスツとした面白さが入っていて、全て黒字で書かれているよりも飽きずに楽しく見て回れる」（YM）。「書籍は少し傾けて置かれているので、平らに置かれるよりも、かがまずに見ることができてよいと思った」（YM）。

「英語で表記されているので外国人にもわかる」（KT）。「『中国王朝の覚え方』という展示があって、学生だけではなく、誰が見ても面白いものであった。秦・漢（後漢）時代の高校世界史で習う分野の展示では、高校生・大学生にとって「なるほどな」と思わせる解説になっていた」（HL）。

「あまり専門的な用語を使わず、訪れた人に親しみやすく理解しやすいような形式で書かれていた。映像端末があり、見るだけでなく、好きな所を拡大縮小できるので分かりやすかった」（SU）。「インスタ映えするような史料の置き方や回廊があり、インテリア的にとってもいいなと思いました。史料が傷まないように、湿度、照明の当て方などに気を付けている展示でした」（TD）。「老若男女、東洋史をよく分かっている人も、そうでない人も納得できるような解説だった」（MK）。

上記の内容を見てみると、単純な感想だけではなく、さまざまな角度から展示法について考察していることが確認でき、こうした設問の仕方が効果を出していることが分かる。つぎに、展示物に関するコメントを見てみたい。

【始皇帝】「帝鑑図説は、解説によると『時代がくだると、始皇帝に対して「悪」



のイメージがつきますが、これには儒者による評価が大きく影響しています。』とあり、この帝鑑図説から、秦の始皇帝に対するイメージが『史記』と違うので、興味深い(HL)。「始皇帝は、完璧ゆえにまわりがついていなくて、暴君とされてしまったのかなと思いました」(TS)。

【劉邦・呂后】「劉邦がしばしばよい人として描かれるのは、劉邦が項羽を倒し、漢を建国したことを正統化するためなのか、それとも後世の人が話を面白くするために少し脚色したかどちらかなのかなと私は思います」(NM)。【玄宗皇帝】「(長恨歌の解説の)「美しさは罪」との言葉にはとても興味をひかれる」(KT)。

【徽宗皇帝】「宣和博古図録は、品の高さ、横幅の長さだけでなく、その品のパーツ一つ一つを丁寧に測っていたところに、徽宗の文化を愛する気持ちが伝わった」(MK)。「徽宗については靖康の変で知っていたが、徽宗が11番目の皇子であったことは知らなかった。他の10人の皇子たちはどうして皇帝にならなかったのか気になった」(MA)。

【中国の刑罰】「『首枷の刑』は、どれ程の辛さなのか、又、食事の時に鉢と平たい匙を使用するとありますが、どうやって食べるのか、いまひとつ想像がつかないので、面白いと思いました」(NM)。

【詰命】「18Cにこんなカラフルな文書があるとは思ってなかったので驚きました」(NM)。「押されていた玉璽がすごく大きかった。何kgの重さなのか気になった」(MA)。「解説では『超豪華な辞令書』と書いてあり、右から黒、赤、金の順で色が塗られていて、特に赤と金の部分は豪華な雰囲気であった」(HL)。

【日本昔噺】「挿絵の上に言葉が並んでいて、形が小さいので、当時の人にとったら、ちょっとした娯楽になり、子供にも良い影響を与えるので、作家さんみたいな人はもうかつたんじゃないかなと思いました」(YM)。

【源氏物語】「英訳、フランス語訳されているのに驚いたし、読んでいてフランス人は面白かったのかなと思った」(OM)。

【妖怪】「中国と日本の絵の違いがわかりやすい」(KT)。

なお、企画展全体の感想としては以下のようなコメントがあった。「とても展示の仕方が良くて、見やすい展示方法だった。展示物の解説文も興味をそそるものでとても良かった。東洋史のミュージアムは初めてだったが、とても良い体験ができたと思った」(SL)。「自分は明の時代についての研究をしたいと考えているので、明の時代の資料もあってよかった」(SL)。

上記のコメントを見ると、展示により学生の興味が喚起され、学習意欲が高まり、新たな疑問をもつきっかけにもなっていることが確認できる。ただ、内容のあるコメントが21名にとどまっていることから分かるように、展示物が多いために注意が散漫になり全体的にコメントが浅くなる傾向があるようにも感じられた。2～3点に絞って深く考察してもらうようにあらかじめ指示し、詳しいコ

メントをしてもらう方式にした方がより効果を上げられたのではないかと思われた。

## (2) 東洋文庫書庫

東洋文庫書庫の見学では、その膨大な蔵書の中から、どれをどのように見せるのかということが重要な課題となるが、今回は、A「多民族多言語の世界を知る」というテーマで、鑑賞物①②を、B「漢文史料の記述法を知る」というテーマで、鑑賞物③④を、C「風俗図の世界を知る」というテーマで、鑑賞物⑤⑥を見てもらった。以下、鑑賞物ごとにコメント内容を詳しく検証してみたい。

### 【鑑賞物①】『滿文附注新旧約聖書』(清代末期)<sup>(6)</sup>

この書籍は19世紀に筆写された満洲語訳の新旧約聖書で、全5冊からなる。作業用紙には「満洲族が建てた清の時代には、満洲語(満洲文字)で書かれた書物も出版されていました。この書物は新約聖書、旧約聖書を満洲語に翻訳したものです」と記し、「満洲文字とは?その記述法は?」を事前に確認してもらった上で観賞してもらった。内容のあるコメントをした学生は17名で、具体的には例えば以下のようなコメントが見られた。

「丸に囲まれた文字はなんなのか少し気になる」(MA)。「所々「°」がある(半濁音?)。文の間にも「○」がある」(YK)。「縦に長い文字。太い線や細い線が組み合わさっている文字」(NM)。「見た目は宇宙人の書いた字だったが、じっくり見ると、一つ一つの字の形が微妙に違っていて、句切り(?)の所は○の中に小さな字が入っていた。その後見学で見たサンスクリット文字にも似ていた」(MK)。

「本を保護するカバーがものすごかったです。文字がとにかくすごかった」(TD)。「ものすごく細かくて書くのがとても大変そう」(TS)。「縦書きで真ん中、終わりころに区切りのようなものがあった。文字の大きさもちがうのがある」(HK)。「いくつかの文字の集まりの後、間を空け、また、いくつかの文字を書いていたので、これが文節か」(SN)。

以上のコメントを見ると、記述法について事前学習したためか、学生が文字の大きさや文章のあり方など記述法に関して自分なりに詳しく考察している様子が確認でき、事前学習が有効であったように思われた。

### 【鑑賞物②】「河口慧海請来大藏経」<sup>(7)</sup>

河口慧海(1866~1945年)は、1901年と1913年の二度、チベット語訳の仏教原典を求めて、当時自由な行き来が制限されていたチベットに入ったが、この資料は、慧海が現地の高僧からもらい受けたものである。



作業用紙には「河口慧海がチベットから持ち帰ったチベット文字で書かれた仏教の経典です。貝葉という形体の書物に書かれています。なお、河口慧海のチベット旅行については、『チベット旅行記（上・下）』（講談社、2015年）に書かれています」と記し、「河口慧海とは？貝葉とは？チベット文字の記述法は？」を事前に確認してもらった上で観賞してもらった。内容のあるコメントをした学生は18名おり、具体的には例えば以下のようなコメントが見られた。

「厚めの紙の裏表両面に文字が書かれている。上下に木の板がついている。満洲文字よりも丸みが少ない。赤い線で文字のまわりを囲んでいる」(MA)。「チベット文字は初めてみたが、長い縦棒に美しい流線が一つ一つ記されていて、達筆な人が書いたのだと一目でわかった」(MK)。「木の板ではさみ、ひもで結んである。側面にラベルがある。思いの外、(貝葉は)紙っぽい。もっと葉に近いと思っていた」(YK)。

「厚みがあり、苦勞して手に入れたものだということが感じ取れました。普通の紙質とは少し違うことが見て取れました」(SU)。「裏表に書かれていて、青いのが表紙。枠は印刷されたもの。貝葉2枚でまとめられている」(HK)。「とても大きく何枚も書いてあったものを、板を挟んでまとめていたので、分量に驚いた」(HL)。「長方形の紙でおなじ形大きさの板ではさみ、間に何の経かわかるように布がはさまっている。一つしか残っていないと思っていたので多く残されていて驚いた」(TS)。

上記のコメントを見てみると、学生が、紙質、用紙形式、保存形体など総合的に観察している様子が確認でき、事前学習が効果を上げているように思われた。

### 【鑑賞物③】『杜工部集』（清代末期）<sup>(8)</sup>

この書籍は、唐代の代表的詩人、杜甫（712~770年）の詩を、詩に対して後世の5人の文人が付けた評（批評・論評）とともに刊行した書物である。5人が付けた評が「套印（重ね刷り）」の形式で色分けされているという特色がある。

作業用紙には「中国の伝統的な書物には注釈がつけられました。それらは一般には「割注」などで記載されましたが、この書物では色分けという珍しい方法で書かれています」と記し、「杜工部とは誰ですか？」を事前に確認してもらい、「考えてみましょう」のコーナーでは「どうやって刷ったと思いますか？」との設問を設けてみた。内容のあるコメントをした学生は27名おり、印刷方法に関する質問の解答としては、活版印刷（12件）、木版印刷（8件）、写し絵（1件）、活版印刷か木版印刷（1件）となった（答えは木版の重ね刷り）。具体的な内容としては例えば以下のようなコメントが見られた。

「色別に木版を彫って刷ったのだと思う。色がかぶってしまっているところはあるが、色が混ざってはいない。赤、青、黄、緑、ピンク、むらさきなど色鮮やか」

(MA)。「文字のスタンプを並べて、並べて固定したのにインクを付けて、紙に刷る。赤文字だけではなく、黄色、緑色も同じように刷る。現代で言うと、印刷所みたいな所があって専門の人が刷っていた。全て機械でやっていたかのようにそろえられていた」(YM)。

「特定の文字が彫られた石を用意して、それを並べて、インクをつけて刷っている。石は1つ1つ丁寧に彫られているため、時間をかけて並べている。正確に印刷されているため、隙間なく埋め込まれている」(OK)。「手書きでかいたものを、水や油などを使い、写し絵的な感じで作成した」(IH)。「木の板をけずって字の形を作り、墨をつけて紙に置いた。木版印刷。1枚=1つの板」(HY)。「別に版木を作る。上下に余白は広く、そこに注もある。中心には巻とページを書く」(SN)。

上記のコメントを見ると、学生が様々な印刷法を知った上で、どの技法であるか検討している様子が確認でき、考察力を高めるには、こうした設問が有効であることが確認できる。

なお、「色分けという方法について質問したところ、文によっては杜甫のことを批判している批評もあると聞いて、時が経てば考え方もその時代によって異なり、偉人が書いた文章も必ずしも肯定されるものではないと思った」(HL)とのコメントもあり、こうしたアナウンスはしておいた方がよいと思われた。

【鑑賞物④】『由潭黄氏宗譜』(清代初期)《資料②》<sup>9)</sup>

この書籍は、安徽省休寧県に住む黄氏(黄という姓を持つ一族)が順治7(1650)年に作った族譜(宗族の由来や系譜を書いた書物)で、大判で、彩色された祖先の肖像が描かれているのが特徴である。

作業用紙には「明清時代には宗族(父系の親族ネットワーク)が盛んに作られ、族譜(宗譜、家譜とも言う)が盛んに編纂されました。これは由潭(地名)の黄氏一族が編纂したものです。ページには、有名な祖先の肖像(春申君)と墓地の図です」と記し、「族譜とは何ですか?」を事前に確認してもらい、「考えてみましょう」では

資料2 『由潭黄氏宗譜』の墓地図  
(筆者小川による模写)



「なぜお墓の形を族譜に載せているのでしょうか？なぜ包み込むような感じに書かれているのでしょうか？」との質問を試みた。

内容のあるコメントをした学生は26名おり、墓地図掲載の理由に関する質問の解答を整理すると、A 忘れないため・重要さや祖先への敬意を示すため(10件)、B 破壊防止のため(7件)、C 祭祀のため(3件)、D 風水のため・よい土地だから(6件)、E 故人の功績を称えるため(3件)、F 転生を願うため(1件)、G 死後の世界を示すため(1件)となった(重複回答あり。答えは重要さと風水)。具体的には例えば以下のようなコメントが見られた。

A:「亡くなった人も忘れずに覚えておくため」(UK)。B:「墓が荒らされないように囲んだ形になっている」(OM)。「周囲の山で墓を守り、盗掘による遺体の紛失を防ぐため」(MK)。「破壊などを防ぐために包み込むような感じに書かれている」(留学生 TE)。C:「祭祀に利用するため」(OT)。

D:「風水的な「げん」をかついだため。山に囲まれ、南に川がある」(KT)。「1つの方角を開けて描くことで鬼門を守る的な意味がある？」(KN)。「すごく良い立地であることを表現するため」(MA)。

E:「墓の大きさによって、墓に入った人の器の大きさを誇示するため」(MK)。「墓の形を載せているのは、形を作り上げた墓が功績を残した人のものであることを象徴している」(OK)。「偉大な人であったから後世に語り継ぐために残した」(SL)。

F:「転生を願ってこのような形にしたのではないかと思った」(MY)。N:「この包まれている感じが、現実とあの世を分けていて、死後の世界として見られていたから」(YM)。

上記のコメントを見ると、墓地図掲載の理由について、学生が様々な面から検討していることが分かり、こうした設問も考察力を高めるのに有効であることが確認できる。

#### 【鑑賞物⑤】「回回羊肉舗」の図(「回回風俗図」より)《資料③》<sup>00</sup>

「回回風俗図」は1920年代に書かれた手描き彩色の風俗画で、全42枚にわたり、モスクや沐浴の様子など北京で生活していたイスラム教徒の風俗が描かれている。

作業用紙には「「回回」とは回族(イスラム教徒)のことです。中国にはイスラム教徒が多くいます。彼らは戒律により、豚肉を食べてはいけないため、羊や牛の肉などを食べていました。これは民国時代のイスラム教徒用の羊肉のお店の図です」と記した。内容のあるコメントをした学生は28名おり、学生の注目点を整理してみると、A リアルな画法(9件)、B 羊肉の処理法・売り方(16件)、C 看板の文字(2件)となった(重複回答あり)。具体的には例えば以下のよう

なコメントが見られた。

A：「陰影までしっかりと描かれている」(YK)。「とてもきれいだった。少しの色の違いが鮮明に描かれていた。少し紙が厚いような感じで、縦に線が入っているような感じだった」(SY)。

B：「昔から肉は保存用に干したり、熟成させていた？しっかりと解体して、内臓を食べていたと思われるので羊肉を食べる文化はかなり古いものだと思う。調理法も研究されていそう」(KN)。「羊の部位が細かいところまで切り分けられて、干されていた」(MK)。「内臓は自然乾燥させている？皮は剥がれており、肉をぬき出しの状態で吊し上げている」(OK)。

「毎日5・6頭の羊が売られていると説明されてある」(TY)。「店に羊を吊るして干していた。これは鮮度を保つために干し肉として食べていたのかな」(HL)。「羊が丸々吊るされている。調理済みの羊肉も売られている。頭・体・尾などに分けられている」(US)。

C：「木の表札に「十六両」という字があったので、意外と高級品なのかもしれない」(MK)。「両・斤と看板のようなものにかかれている」(HK)。

上記のコメントの内容を見ると、学生が絵画資料に描かれている色々な物に注目し、売られ方、保存方法、値段などについて独自に考察していることが分かる。ただ、内容のあるコメントをした学生が28名に止まっていることから考えると、あらかじめ注目点(肉の売られ方、看板の文字など)を指示しておいた方がよいようにも思われた。

なお、感想として以下のようなコメントもあった。「肉の保存の様子や部位、店がどのようなものだったかが詳しく書かれていて見やすい絵だと思いました」(SU)。「文書だけではわからないことも、絵がある事によってイメージが付きやすい」(SL)。「リアルにかいてあってすごいなと思った」(TS)。

これらのコメントを見ると、やはり、こうした絵画資料が、学生が社会生活をイメージする上でとても有用な教材となっていて、それにより、学生が大きな刺激を受けていることが確認できる。このことから、文字資料だけではなく、絵画資料の活用もさらに検討する必要があることが再確認できる。

資料3 「回回羊肉舗」の図  
(上部に解説文あり。筆者  
小川による模写)



【鑑賞物⑥】「苗冊（苗族風俗図）」（清代中期）《資料④》<sup>11)</sup>

清代には、中国南方の少数民族の生業や風習をまとめた書物が多くつくられ、「百苗図」や「蛮苗図」などと呼ばれた。この資料もその一種で、手描きの彩色版で、全部で82の場面とその解説が書かれている。

作業用紙には、「清代の中国南方には「苗」〔ビョウ/ミャオ〕と呼ばれる少数民族がいました。これはその人々の風俗について書いたものです」と記した。学生には《資料④》以外のページも適宜見てもらった。内容のあるコメントをした学生は25名おり、学生の注目点を整理してみると以下のようになった（重複回答あり）。

A 文書形態（5件）、B 画法（5件）、C 服装（13件）、D 髪型・帽子（7件）、E 農耕・採集（4件）、F 祭祀・宗教活動（6件）、G 居住地（3件）、H 女性による囲碁（4件）。その他に、武器・楽器・かご・女性の紡織・道具について各1件の指摘があった。

このようにコメントが多岐にわたったのは、“折本”であることを見て理解してもらえるよう、2冊の史料をそれぞれ扇状に広げて置いたため、56の場面を見ることができたからであるが、そのぶん対象・場面が特定できず、したがって個別の場面の詳しい観察に至っていない回答が見られた。

具体的な内容としては例えば以下のようなコメントが見られた。

A：「折本になっている。文章と絵がセットで見開き1ページになっている。1ページごとに判子が押してある」(OM)。「左が説明文、右が絵。全ページ色付き」(YK)。B：「絵がとても繊細でとても綺麗だった。当時であの絵のクオリティーはとてもすごいと思った」(HS)。

C：「清のチャイナ服や漢服（明代以前の漢民族の衣服）とは全く違った服装をしている。頭にワラの様なものをつけている。貴族っぽい女性はひらひらとした派手な服を着ている」(NM)。「民族衣装が畑を耕したり、動きやすいように、ロングスカートみたいなのではない」(YM)。「男女どちらも青い帯をしている。女性は赤い靴を履いている」(MA)。

「女性はさらしのようなものをしている。靴は先がとがっている」(YK)。「おっぱいを隠す布当てがある」(OT)。「女性が胸をかくす布当てがあり、スカート

資料4 「苗冊(苗族風俗図)」より  
(筆者小川による模写)





みたいなのをはいている」(HY)。

D:「髪を男も女もしばっている」(HK)。「特徴的な髪型で漢民族や満洲族とはまた別の雰囲気がありました」(SU)。

E:「肩にかけて苗のようなものを運んでいる。大きな木製の入れ物を背負って採集のようなことをしている」(HK)。「鋤などで畑を耕していた」(HL)。

F:「お坊さんがいたところにお供え物が置いてある。たぶん聖域的なところ」(MA)。

G:「標高の高い場所で作業をしている(?)」(OK)。その他に以下のようなコメントもあった。「女性は服を作ったり、家庭的である」(YM)。「道具が木中心らしく、唐代の文化に似ているように思えた」(MK)。

なお、以下のような感想もあった。「書いてある絵から場面が想像できたり、その民族の人達の文化なども知ることができた。このような絵が残されていることにより、歴史が分かりやすくなる」(SL)。

上記のコメントを見ると、学生たちが髪型や服装、生業の特色などを見出している様子が確認できる。ただ、鑑賞物⑤と同様に、コメントをした学生が25名に止まっていることを考えると、より具体的な注目点(服飾の特色、職業の内容、環境など)も示しておいた方が良かったのではないかと考えられる。

### (3) 湯島聖堂

作業用紙には「湯島聖堂とは?自分が特に見たいものは?」と記し、事前に記入してもらった。内容のあるコメントをした学生は23名おり、その内容を見ると、大成殿(17件)、入徳門(6件)、孔子像(2件)となった。具体的な内容としては例えば以下のようなコメントが見られた。

「大成殿が思っていたより大きくて圧倒されました」(US)。「全体的に黒く規模がでかい。屋根の上にしゃちほこのようなものが置かれている」(NM)。「説明によると、中に孔子や四聖(曾子、顔子など)が祀られているらしいので、見てみたかった」(HK)。「屋根は銅。全体的に飾りが少ない。窓は丸窓。塗は黒が多い」(SN)。

「入徳門が江戸時代からあって、風情があった」(SM)。「入徳門にはばくが装飾してある」(YK)。「入徳門の横にある獅子の像がかっこよかったです」(SU)。「入徳門は江戸の火事も免れており、唯一現存するものと先生が言っていたので、見るのができてよかった」(HL)。

上記のコメントを見ると、建物の特徴や装飾について細かに観察していることが確認できる。ただ、内容のあるコメントをした学生が23名に止まっていることを考えると、建造の経緯だけではなく、建築様式などについても注目点をさらに示しておく必要があったと思われる。



#### (4) 小石川後樂園

作業用紙には「小石川後樂園とは？自分が特に見たいものは？」と記し、事前に記入してもらった。内容のあるコメントをした学生は17名おり、その内容を見ると、庭園の雰囲気（14件）、大泉水（2件）、円月橋（3件）、西湖の堤（1件）、建物（2件）、石垣（1件）となった。具体的には例えば以下のようなコメントが見られた。

「敷地内にたくさん見所があり、飽きがこない感じでした。建物がどれも魅力的だと思った」(SU)。「今でもあそこまで昔の物が残っているとはすごく驚いた」(IH)。「庭園という場所はあまりなじみがなかったけれど、とても広くて自然豊かでとても良かった」(SL)。

「日本と東洋を感じられる場所であった」(YH)。「ゆっくり見たかった。どこから見てもすばらしい庭園」(OS)。「自然と歴史感があふれる岩や建造物などが江戸時代の日本庭園の雰囲気をすごく表している。茨城にある水戸偕楽園と記されている札などもあって、そのつながりを調べてみようと思った」(IH)。

「大泉水は中心の辺りに島があって、どこから見ても風流な感じがした。次はもう少しゆっくり見てみたい」(HK)。「全体的にすごく美しかった。特に自分がみたかった大泉水はとても広く琵琶湖そっくりに再現されており、感動した」(TY)。

「円月橋は渡ることが出来ないが、実物は大きかった」(HL)。「外の石垣に山の文字があり、誰がこの石垣をもってきていたのかの印を見ることができて非常に良かったです。瓦の紋様や裏門の門にも紋様があり、とても美しいと思いました。西湖の堤、屏風岩、得仁堂の龍、円月橋、八卦堂跡、愛宕坂などもとても興味深く、建築自体も美しいと思いました」(TD)。

上記のコメントを見ると、庭園の様々な物が学生に刺激を与えていることが確認できる。事前に庭園建設の沿革や注目点について少し調べてもらったことも効果を上げているように思われた。

内容のあるコメントをした学生が17名に止まっているのは、見学時間がやや短かったことも影響していると考えられる。また、この場所についても注目点をあらかじめいくつか示しておいた方がよいように思われた。

#### 4 学生アンケートの分析

作業用紙では、今回の研修に対するアンケートの欄も設け、45名より回答を得た。以下、その内容について分析してみたい。

(1) 設問1「今回の研修について、役に立ったこと、興味をもったことを書いてください」について

設問1については、45名全員より回答があった。言及のあった対象を整理す

ると、A 東洋文庫 (37 件)、B 東洋文庫書庫 (16 件)、C 東洋文庫ミュージアム (18 件)、D 小石川後樂園 (8 件)、E 湯島聖堂 (1 件) となった (重複回答あり)。以下、具体的な記述内容について、代表的なものをいくつか紹介してみたい。

A：「(東洋文庫は) とても外見も内観も綺麗でまた行きたいと思った。入口から入り階段を上ってすぐの所にあった大量の本棚を見て、とても圧倒された。またとても良い雰囲気だと思った」(UK)。「東洋史に関する博物館なんて行ったことがなく、行けていい経験ができた」(IH)。「東洋史学コースではありますが、日本史への興味・関心が強く湧いた一日でした。博物館自体あまり来たことが無かったのですが、展示の仕方、湿度調整など知らないことが多く、とても有意義でありました」(US)。

「(東洋文庫は) 捜査資料の保存場所みたいに書庫がたくさんおいてあった。とてもみやすく展示されていた。数の多い資料を一つ一つ丁寧に保存していて、とてもすごいと思った」(IH)。「一番東洋文庫に興味を持った。古い物が沢山あり、全てが見られなかったのもっとゆっくり見たかった。来年も楽しみたい」(SY)。「本物の資料を間近で見て勉強への意欲がわいた」(IH)。

「東洋文庫に展示してあった物は、とてもおもしろいものでした。東洋史を学んでいる者として、大変貴重な体験をしたと思った」(SL)。「役に立ったことは、東洋文庫での史料の説明です。今後他の人に知識を伝える事があるかもしれないので。興味を持ったのは今回行った様々な場所の歴史と東洋文庫内に他にどのような史料が保存されているかについてです」(SU)。

「興味をもったことは、中国の各王朝時代の文書です。これは、高校世界史の教科書とは違う考え方で解説がなされていたので、私は漢文を読めるようになり、さらにこういった文書を読み、自分の意見や考えを言えるようになりたいと思いました」(HL)。

B：「東洋文庫の裏側に入れたのは貴重な経験だったと思う。気温や湿度を厳重に管理していて、火事が起きてもすぐ対処できるようになっていたのも、すごいと思った」(KT)。「東洋文庫の書庫が良かった。八時間くらいは余裕でいられる」(KN)。「普段入れない書庫に入れて、感動しました。書庫の史料が読めるようになれば、もっと楽しいだろうなと思いました」(TD)。

「東洋文庫の普段中に入れられない所に入れて、杜工部の現存している本などを見ることができて、とても良かった」(HS)。「書庫の中に入るという貴重な経験ができてとても良かった」(UK)。「チベット文字の資料を間近で見ることができたのがとても良かったが、時間配分が上手に活用出来なかったのが悔しいと感じた」(OK)。

「苗族について (風俗、歴史、その他)。中国の文化を描いた図 (羊を解体している絵など) は容易に文化を思い起こさせる」(MK)。「先祖の墓の地図があっ

たことがとてもおもしろいなと思いました」(TS)。

C:「東洋文庫の「悪人かヒーローか」展はとても素晴らしかった」(OU)。「企画展示の内容がとても興味を持ってました。実際の史料を近くで見ることができ、史料に書かれている文字が見ることができて良かったと思います。時間が少なかったです」(ML)。

「悪人の裏話を知って、見方が変わることを実感できた」(KN)。「東洋文庫に三国志の文献が多くあり、じっくり見ることができたのですごく満足しています」(HY)。「三国志はいろいろな視点で描かれていて、おもしろいと感じた。知識があるので悪人展は楽しめた」(HK)。「東洋文庫ミュージアムについては知らなかったが、今回見学に行くととても興味を持った。博物館学芸員資格取得の実習の時に研修に行きたいと思った」(MA)。

「東洋文庫に行った事で、史料に興味を持った。今まで字がどんな風が変わっていったのか伝わってきたのか考えた事はなかったけど、解説を読んでいると色々な地域から影響を受け、それによって医学にも発展があった事に気づけた。初めて博物館でもっと見ていたいと思えた時間でした」(YM)。

D:「庭園がすてきだったので、中国庭園にも興味がでた」(OS)。「小石川後樂園を見ることができ、更に興味を持てた」(TY)。「庭園や自然に対する各文化の考えに興味をもった」(HJ)。「あの交通が不便な時代に、日中交流に力を注いだ学者たちに感心した」(留学生 TE)。「なぜ江戸時代にあの規模の庭園を作れたのか気になる」(OM)。

E:「湯島聖堂の中がどうなっているのか気になる」(OM)。

上記の感想を見ると、「東洋文庫に初めて来たこと」「普段一般には未公開の書庫で実物の資料を見たこと」という、経験しなかったこと、史料を間近に見たという純粋な感動・驚きから、「見方が変わることを実感できた」「墓の地図があったことがとてもおもしろい」「いろいろな視点で描かれていて、おもしろい」など多様性を知った好奇心・喜び、そして「なぜ江戸時代にあの規模の庭園を作れたのか」「史料に興味を持った」「漢文を読めるようになり……自分の意見や考えを言えるようになりたい」といった学習意欲・知的好奇心を満たしたいという動機づけ・意識向上まで見られ、多くの学生が知的な刺激を受け、書物の世界に対する理解を深めるという研修の目的が一定程度達成されていることが窺え、東洋文庫の書庫とミュージアムの見学が教育的な効果を上げることが確認できる。

なお、事前準備の作業についても、「事前準備を行っていたので、初めて見たが興味・関心を持てた」(HL)との感想もあり、スムーズに観察・見学に入ることができていることから窺えるように、高等学校における事前授業・事前活動と同じく、大学の学外研修においても、これらの作業が、学習意欲を高め、知的好奇心や観察力を研ぎ澄ませる効果があったことが分かる。

(2) 設問2「今回の研修の内容に興味を持ちましたか？該当するものにマルをして下さい」について

この設問については、45名全員から回答があり、はい31名(69%)、まあまあ14名(31%)、いいえ0名(0%)となった。今回の研修の試みに対して、約7割の学生が興味をもったと回答していることを考えると、今回の東洋文庫等での学外研修の教育的効果が高いことが数値的にも確認できる。

(3) 「特に興味をもったもの」について

なお、設問2で「はい・まあまあ」を選択した学生に対しては、「特に興味をもったものは何ですか？」との質問をさらに行ってみた。その結果、45名全員より回答があった。言及があった対象を整理すると、東洋文庫(31件)、湯島聖堂(1件)、小石川後樂園(8件)となった(重複回答あり)。

東洋文庫については、具体的な言及もあり、整理すると以下ようになった。回回風俗図(3件)、由潭黄氏宗譜(2件)、河口慧海請来大藏經(3件)、史記(1件)、三国志(2件)、苗冊(3件)、妲己(1件)、ロシア帝国服飾図鑑(1件)、モリソン書庫(1件)、ミュージアム(1件)。以下、具体的な記述内容について、代表的なものをいくつか紹介してみたい。

「東洋文庫の書籍や絵図は、そもそも一般人の見ることができるものではないので、それだけで貴重な経験ができた」(MK)。「東洋文庫ミュージアムは他の展示も見てみたい」(MA)。「東洋文庫の史料。字だけではなく、当時の人が描いた絵は当時の風景や生活が細かく記されていてもっと見たかった。見ていて面白かった」(YM)。「回回風俗図」が面白いと思いました」(TD)。「東洋文庫の物をもう少し見たかった」(SY)。「東洋文庫の普段はいれない所には入れてとてもすごかった。少しわくわくした」(SL)。「東洋文庫や湯島聖堂を通して、中国と諸外国との関わりに興味を持ちました」(HL)。

上記のコメントを見ると、書庫やミュージアムで東洋文庫の資料を見て、さらに書物や絵画資料を見たいという知的欲求が学生に芽生えていることも確認できる。なお、「毎日のように東京に行くが知らない場所が沢山あると思いました」(IH)との感想もあり、今回の研修先が学生にとって初めての場所であることもあり、そのこと自体も大きな刺激になっていたことも分かる。

## 5 おわりに

以上、東洋文庫等で行った学外研修の教育的効果について、主に学生の作業用紙の内容の分析しながら考察してみた。学生アンケートから見ると、東洋文庫の書庫の資料やミュージアムなどを活用した今回の研修は、約7割の学生が興味を持ったと回答しているように、その程度は学生によって異なるが教育的効果はか

なり高いことが確認できた。

作業用紙に関しては、事前学習の試みや「考えてみましょう」のコーナーが一定の教育的効果を上げていることが確認できた。特に「考えてみましょう」のコーナーは、学生から様々な意見が出されており、学生の思考力を向上させる上で有意義な作業になっていたことが確認できる。限定したテーマや問題を与えることにより、学生がさまざまな方法で回答を導きだそうとする姿を目の当たりにし、こうした工夫・仕組みの重要性を再認識させられた。

また、博物館学的な考察についても、様々な面からのコメントが記され、学生の観察眼を鍛えるよい作業になっていたことが分かった。さらに、座学では特に意見を発言しない学生が今回の学外研修では多くのコメントを記した事例もあり、学生だけでは行かない場所に行き、普段見ないものを間近に見てもらう機会を設けることは、マスメディアやSNSなどから大量の情報が流されている現代において、重要な意味を持ち、さらなる可能性を秘めた教育方法であると言える。

しかし、内容のあるコメントは半数程度に止まっており、それをどう解決し、教育的効果をより高められるかが今後の課題であることも確認できた。原因としては、作業用紙の内容の不備以外に、スケジュールがやや詰め込みすぎになっていて、時間がやや足りなかったこともあるように思われた。

作業用紙については、より内容のあるコメントを増やすために、「ミュージアムでは数点に絞って深く考察させる」「書庫の資料や史跡に関しては、注目点をさらに示し、『考えてみましょう』のコーナーもさらに充実させる」などの解決策を図る必要がある、また、時間配分についてもより効率的な方法を工夫する必要があると考えられる。これらの点については今後さらに検討をつけ、次回の研修では新たな方法を実験し、さらにその効果について検証してみたいと考えている。

#### 〈註〉

- (1) 甘利氏の論文は以下のとおり。「大学における中国史授業の新デザインの試み (1) (2) ——大門正幸氏考案の「全員先生」方式の応用——」(『大分大学教育福祉学部附属教育実践総合センター紀要』29、30、2012年)。「外国史・世界史授業のアクティブラーニング化への試み (1) (2)」(『教育実践総合センター紀要〈大分大学〉』34、35、2016年、2018年)。青柳かおり氏と共著「外国史・世界史授業の新しい視点への試み (1)」(『教育実践総合センター紀要〈大分大学〉』35、2017年)。「大学における華僑・華人・チャイナタウンの授業実践：工夫と課題」(『大分大学高等教育開発センター紀要』9、2017年)。筆者小川の拙稿は「東洋史学専攻の大学生による Wikipedia 検証作業の試み——学生の自己検証能力の育成を目的として——」(『漢字文献情報処理研究』13、2012年)。



拙稿については、甘利氏より、前掲「大学における中国史授業の新デザインの試み (2)」で、「学生の自主性や実践的学習活動を重視しつつ、興味ある授業の開発を行っており、かつ学術的に高いレベルの授業を提案・実践して教育効果が上げられている点は高く評価されるべきである」と言及して頂いた。なお、筆者小川は、中国語教育と異文化理解教育の連動について、「中国語授業における異文化理解教育について：理工系大学生対象授業での試みを中心に」（『法政大学小金井論集』8、2011年）で考察したこともある。

- (2) なお、展示室には、1917年に岩崎久彌氏が北京駐在の G. E. モリソン博士からまとめて購入した2万冊のモリソン・コレクションが展示されている「モリソン書庫」もある。
- (3) 展示品については、『時空をこえる本の旅 19 悪人か、ヒーローか Villain or Hero』（東洋文庫、2018年）参照。なお、東洋文庫所蔵の資料について紹介した本として、東洋文庫編『記録された記憶——東洋文庫の書物からひもとく世界の歴史』（山川出版社、2015年）がある。
- (4) 各テーマの関連資料は以下のとおり。紂王・妲己（『史記』『列女伝』）。始皇帝（『史記』『帝鑑図説』）。劉邦・呂后（『史記』『後漢書』）。武帝（『漢書』『塩鉄論』）。曹操（『三国志』『絵本通俗三国志』）。水滸伝の英雄（『忠義水滸伝画本』）。則天武后（『資治通鑑』『歴代君臣図像』）。玄宗皇帝（『長恨歌図抄』）。徽宗皇帝（『宣和博古図録』『宣和遺事』）。李自成（『明史』『華夷變態』）。鄭成功（『明清軍談国姓爺忠義伝』『アモイ近海図』）。西太后（『大清徳宗景皇帝実録』）。
- (5) 内訳は以下のとおり。展示法(16件)。紂王・妲己(3件)。始皇帝(4件)。劉邦・呂后(2件)。三国志(3件)。玄宗皇帝(1件)。徽宗皇帝(2件)。西太后(1件)。李自成・鄭成功(1件)。中国の刑罰(1件)。佛郎王歌(1件)。誥命(4件)。アヘン吸引者とばくち打ち(1件)。日本昔噺(1件)。ターヘル・アナトミア(1件)。源氏物語(1件)。妖怪(3件)。
- (6) 『満文附注新旧約聖書』。請求記号:MA2-20-8。
- (7) 「河口慧海請来大藏経」。請求番号:蔵外文献 333 など。前掲『記録された記憶』第4章「チベット大藏経」参照。
- (8) 『杜工部集』。請求記号:貴重書 XI-3-A-d-50。前掲『記録された記憶』第2章「杜工部集」参照。
- (9) 『由潭黄氏宗譜』。請求記号:貴重書 XI-3-B-28。
- (10) 「回回風俗図」。請求記号:VI-1-9。
- (11) 「苗冊（苗族風俗図）」。請求記号:II-11-K-22。

【追記】東洋文庫の書庫の見学に関しては、図書部課長の瀧下彩子氏をはじめ、東洋文庫関係者の方々に様々なご協力を賜った。また、旅行の手配については、京王観光株式会社調布支店の佐藤透氏に色々のご配慮頂いた。記して感謝申し上げたい。